

山科本願寺南殿跡 (第12次)

調査期間：令和6年4月3日(水)～4月25日(木)

調査機関：京都市 文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課



1 発掘調査について

山科本願寺南殿跡は、京都市山科区音羽伊勢宿町周辺に広がる周知の埋蔵文化財包蔵地(遺跡)です(図1)。今回この遺跡内において、個人住宅新築工事が計画されました。当該地は、山科本願寺南殿復元案の内郭南側で外郭内に位置します(図2)。東隣の平成18年度調査(図2-2)では、室町時代後期の溝や建物跡、江戸時代以降の東西溝や土坑等を確認しており、今回の調査地においても同様の遺構が展開している可能性があり、発掘調査を実施しました。

2 山科本願寺南殿跡について

文明10年(1478)に越前から畿内に戻ってきた、浄土真宗本願寺派第8代宗主の蓮如は、本願寺再興の地として山科を選び、山科本願寺の建立にあたります。周辺には寺内町が設けられ、土塁と堀で囲まれていました。延徳元年(1489)に山科本願寺を実如に譲った蓮如は、隠居場所として山科本願寺から東に約1km(現在の音羽伊勢宿町周辺)の地に、山科本願寺南殿を造営します。南殿も本願寺と同様に土塁と堀に囲まれ、その中心には建物や庭園等が造られました。その後南殿は天文元年(1532)に焼失し、その跡地に光称寺(現在の光照寺)が建てられます。現在、その境内に土塁と堀等が良好な形で残っています。

山科本願寺南殿跡では、過去に複数回発掘調査が実施されています(図2)。平成14年度調査(図2-1)では、南殿に関する土塁や堀等の遺構を確認し、その後国史跡に指定されました。調査地の東隣で行われた平成18年度の調査(図2-2)では、室町時代後期の溝(SD12)

が南から北西に延び、西側に曲がり調査区外へと続くことを確認しています。また、江戸時代以降の東西方向の溝2条(SD7・8)が西側へ続くことを確認し、農業用の水路跡と考えられています。

3 今回の発掘調査成果

調査では、第1面で江戸時代の溝や土坑、第2面で室町時代～江戸時代の溝や土坑を確認しました(図3・4)。このうち確認した溝について紹介します。

第1面では、東西方向の溝を2条確認しました(SD1・2)。SD1は、検出長約2.6m、幅約1.0m、深さ約0.35mです。SD2は、検出長約2.7m、幅約1.2m、深さ約0.45mです。ともに調査区外の東側及び西側へと続いていきます。また、平成18年度調査(図2-2)のSD7・8と同様に北東から南西に向かって下がることやその延長上にSD1・2があることから、同一の溝で農業用の水路跡の可能性が考えられます。

第2面では、調査区南東側で西から南側に曲がる溝を確認しました(SD3)。検出長約2.4m、幅約0.3m、深さ約0.45mです。東側及び南側の調査区外へと続きます。遺物は出土していないため明確な時期は不明ですが、平成18年度調査(図2-2)のSD12が西に振っており、SD3がその延長上にあたることから、同一の溝である可能性があり、室町時代後期の南殿外郭に伴う区画溝ではないかと考えられます。

以上から、この調査地において室町時代から江戸時代以降に土地利用がされていたことがわかりました。今後山科本願寺南殿跡での調査が進むことで遺跡の詳細が明らかになることを期待します。

(八軒かほり)

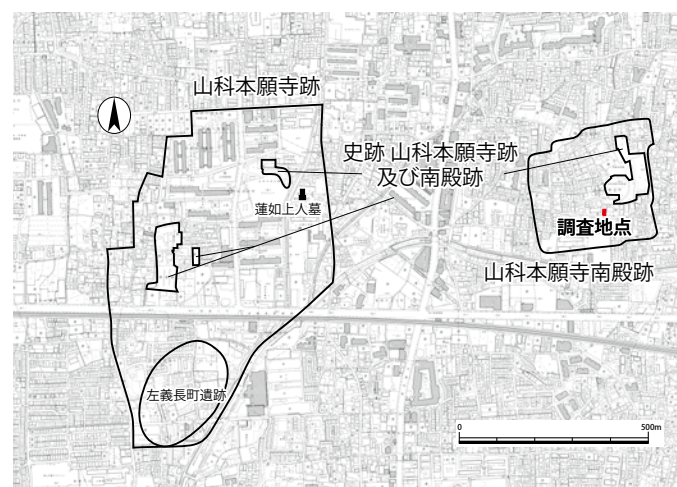


図1 遺跡位置図

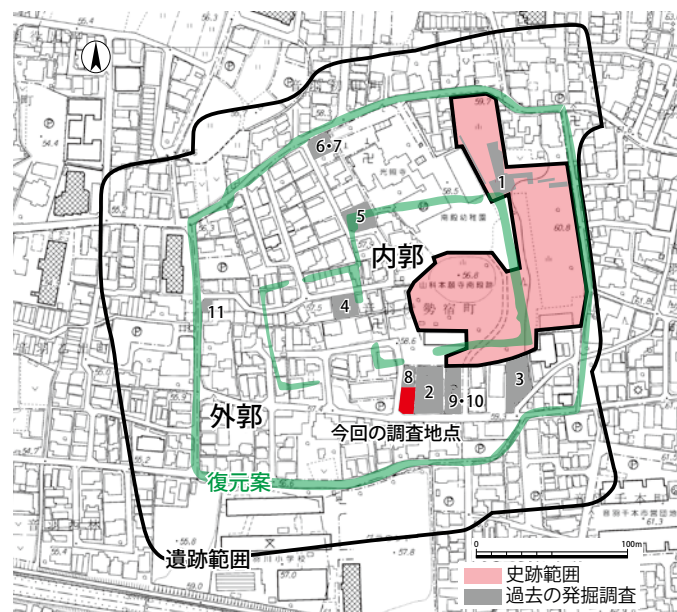


図2 山科本願寺南殿復元案と調査位置図

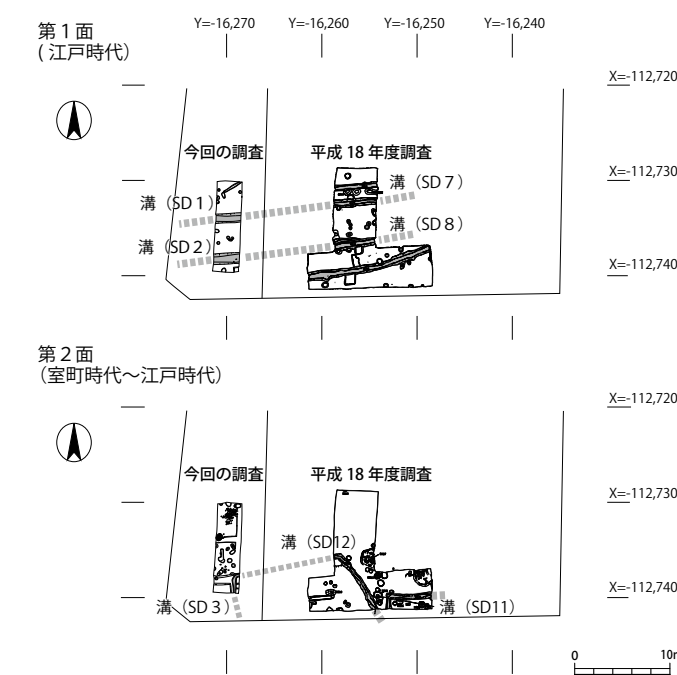


図5 平成18年度調査との位置関係



図3 第1面全景(北から)



図4 第2面全景(北から)